高知県幡多郡のアクセント

土居重俊

高知県幡多郡が乙種アクセントに属していることは知られているが、実際には幡多郡一円が乙種である訳ではない。東部の佐賀町附近は若干甲種に近いし、北部の津大・江川崎・十川・昭和の各村、いわゆる北幡地方は、隣接する高岡郡檮原村とともに準一型地帯を形成している。これらの地帯以外は大体乙種に属している。今乙種アクセントの代表地点として中村町（近く市となる予定）を選び、他の町村にも適宜触れつつアクセントの記述的考察を試みることとする。

一、名　詞

一音節語では第一類に属する語、柄・蚊・気・子・巣・血・戸・帆に助詞ガをつけると、東京と同じく○▽となって、いわゆる下中型をとる。（高大研究報告第二号の拙稿を訂正する）

第二類の毛・名・値・葉・歯・日・矢に助詞がついた場合も、○▽型、但し八ガ〔歯〕

第三類の絵・尾・木・粉・酢・田・手・菜・荷・根・火・穂・目・湯・輪に助詞がつくと、○▽型となる。

一音節語は東京と幡多（中村）とでは型が殆ど一致するが、東京のゴカ（碁）ヤカ（矢）が幡多でゴガ・ヤガ・東京のバカ（場）が幡多でバガとなるなどが相違している。結局幡多は①平板○▽②頭高○▽の二型である。

二音節語では第一類の飴・牛・梅・顔・柿・風・金（かね）・霧・口・首・鍬・腰・酒・砂・竹・鳥・庭・箱・鼻・羽・筆・星・道・水・虫が○○型であるが、助詞のついた場合は○○▽とならないで○○▽の型をとることは注目すべきである。幡多では三音節以上の多音節語の平板式は、頭と尾とに中位の（三段観による）山があらわれるのである。（小林英夫「言語学方法論考」七五五〜・音声学協会々報第七一号拙稿「土佐幡多郡に於ける音声現象」八〜参照）

第二類の石・上（うえ）・歌・音・紙・川・旅・梨・夏・橋・旗・入・昼・冬・孫・町・胸・雪が○○・○○▽型となる。

第三類の足・犬・池・色・腕・馬・鬼・親・貝・髪・亀・草・鞘・雲・桑・米・坂・島・炭・月・綱・鳩・花・豆・耳・山・指も○○・○○▽型をとる。（「指」だけはユビ。）

第四類の跡・粟・息・板・糸・稲・臼・海・帯・笠・肩・空・種・杖・中・箸・針・舟・松・麦が○○・○○▽型となる。

第五類の赤・秋・朝・汗・雨・桶・影・蜘蛛・鯉・声・猿・露・鶴・猫・春・前・窓も○○・○○▽型となる。

二音節語も播多は東京と殆ど型が一致するが、東京のテッ(鉄)が播多でテツ、東京のクモ(雲)がクモ、東京のチチ(父)がチチとなるなどが相違している。結局播多は①平板○○②頭高○○尾高○○の三型である。

三音節語では第一類の霞・形・鰹・着物・車・煙・水・肴・机・鼻血・額・羊が○○○とならないで、○○○・○○○▽型となる。この首尾高平板の語も、極めてゆっくりと丁寧に発音した場合は、一般に首尾の山がくずれて全平に近くなりがちである。(この場合山をくずさぬ人も稀にある。)この首尾高平板は中村町を中心に呉同・後川・東山・東中筋・中筋などの村や大方町・下田町あたりで聞かれるが、宿毛町・大正町・大内町・月灘村・柏島・沖の島・鵜来島などと中村町を遠ざかると聞かれなくなる。これらの地域では大体○○○型となる。

第二類の間・小豆・えくぼ・桜・釣瓶・百足がエクボ・アイダ・サクラ・アヅキ(釣瓶・百足同型)となる。サクラとアヅキは共に助詞をつけなければ殆ど区別ができぬが、助型をつけると、サクラガ(中下下中)アヅキガ(中下上下)のような型になって、「小豆」は明瞭にキが高くなる。

第三類の頭・男・表・女・鏡・敵・刀・言葉・鋏・東・袋がカタナ以外は全部○○○型

第四類の朝日・命・胡瓜・心・姿・涙・火箸・枕がすべて○○○型

第五類の兎・鰻・烏・狐・雀・背中・高さ・狸・鼠・蚯蚓がカラス・タヌキ・タカサの外はすべて○○○型

第六類の苺・後・蚕・鯨・薬・便り・盥・棒・病が苺・蚕・薬・盥が○○○で、他はすべて○○○型

第七類の鮑・力……が○○○型

播多の三音節語は①特殊平板○○○②頭高○○○③中高○○○④尾高○○○の四型となる。

四音節語は①特殊平板型トモダチ②頭高型キョーダイ(兄弟)③中一高型アサガオ④中二高型カラカサ⑤尾高型オトートの五種が認められる。播多の四音節語を検討してみるのに、第三音節・第四音節に山が来る場合及び平板型の時のみ、第一音節に中位の山を生ずる。つまり○○○○・○○○○・○○○○である。第二音節に山が来た時は第一音節は低くなる。つまり○○○○である。又最後の音節に中位の山が現れるのは平板型の時だけであって、○○○○・○○○○などのような現象はもとより起らない。

二、動詞

二音節語では第一類の行く・置く・押す・貸す・買う・聞く・咲く・積む・飛ぶ・泣く・鳴る・振る・巻く・言う・着る・蹴る・為るが○○型

第二類の書く・勝つ・切る・食う・来る・漕ぐ・刺す・立つ・取る・飲む・降る・蒔く・待つ・見る・読むが○○型

大体東京と一致するが、東京のケル(蹴)・ヌク(抜)・オル(又はオル)(居)がそれぞれ播多ではケル・ヌク・オルとなるなどが相違している。結局播多は①平板○○②頭高○○の二型である。

三音節語では一段活用の第一類、開ける・当てる・変える・捨

てる・煮える・載せる・惚れる・負ける・焼けるがすべて○○○型

一段活用の第二類、受ける・起きる・落ちる・掛ける・詰める・逃げる・晴れる・見える・見せるがすべて●○○型

四段活用の第一類、上がる・当たる・歌う・変わる・坐る・眠る・笑うがすべて○○○型

第二類の余る・怨む・思う・泳ぐ・曇る・作る・光る・休むのうちオヨグを除いてすべて●○○型

第三類の遊ぶ・歩く・隠す・入る・参るがアソブ・ハイルを除いて●○○型

三音節語で東京と型の異るものを若干挙げるならば、東京のウバウ（奪）・オヨク・ソシル・ネラウが幡多では、ウバウ・オヨグ・ソシル・ネラウなどとなる例が挙げられる。結局幡多は①特殊平板○○○②中高●○○の二型である。

四音節語では第一類の生れる・重ねる・並べる・始める・忘れるが全部○○○○型

第二類の集める・調べる・倒れる・流れる・離れるが全部○○●○型

第三類の答える……が○○●○型

他の語も検討した結果幡多の四音節語は①特殊平板○○○○②中高●○○○（例、踏込む）③中二高○●○○の三型となる。

三、形容詞

二音節語の好い・無いはそれぞれ○●型

三音節語の第一類、赤い・厚い・甘い・薄い・堅い・軽い・暗いがいずれも○○●型

第二類の暑い・白い・高い・近い・強い・早い・深い・若いがいずれも○●○型

三音節形容詞は強調の場合、「堅い」がカターイ、「軽い」がカルーイ、「白い」がシローイ、「長い」ナガーイとなることがある。結局幡多は①特殊平板○○○②中高●○○の二型である。

四音節語の危い・少ないはアブナイ・スクナイとなる。東京のオカシー・タノシーなどもオカシー・タノシーとなる。その他六十四語について検討したが、幡多は①特殊平板○○○○②中高○●○○の二型である。

四、副詞

二音節語では①平板型にチト・モー……などがあるが、これも文節になればチトタラヌのような傾向をとる。②頭高型にゴク・サゾ・サテ・ナオ・マダ……など。

三音節語では①特殊平板に型アマリ（アマリアカイ「赤」）②頭高型にイツカ（何時）・イマニ・ウント・カナリ・キット・ジット・ズット・ソット・チャント・ヤットなどがある。後半の語は東京と型が相違している。③中高型にジツニ・タブン・ドーゾ・マタワ・ヤハリ・ワザトなどがある。

四音節語では①特殊平板型にタビタビ・ダンダン（ダンダンとも）……があり、②頭高型にトニカク・ナンダカ……がある。③中一高型のオソラク・マスマス・クスクス・スタスタ・ピカピカなどは東京と一致するが、東京の頭高オイオイ・ガラガラ・ゴロゴロ・スラスラ・ドンドンなども●○○○型にしてしまう。幡多の中一高型には相当根強いものがある。④中二高型には東京のコンモ

リ・ションボリ……がコンモリ・ションボリ……となる例がある。

五、助動詞

(1)れる・られる・せる・させる

一応東京と比較すれば次の通りである。

(東京)		(幡多)	
オサレル	(押オス)	オサレル	(オス)
アテラレル	(当アテル)	アテラレル	(アテル)
ヤカセル	(焼ヤク)	ヤカセル	(ヤク)
ヒロ。ケサセル	(ヒロ。ケル)	ヒロゲサセル	(ヒロゲル)

平板型動詞にこれらの助動詞がつくと、幡多では首尾高の傾向をとる。

(東京)		(幡多)	
カカレル	(書カク)	カカレル	(カク)
トドケラレル	(トドケル)	トドケラレル	(トドケル)
ヨマセル	(読ム)	ヨマセル	(ヨム)
コサセル	(来クル)	コサセル	(クル)

起伏型動詞にこれらの助動詞がつくと幡多では大体レル・セルが高低に、ラレル・サセルが低高低となってつづく。

(2)たい・ない・ん

(東京)	(幡多)
シリタイ (知シル)	シリタイ (シル)
ネムリタイ (ネムル)	ネムリタイ (ネムル)
ハタラキタイ (ハタラク)	ハタラキタイ (ハタラク)
シラナイ	シラナイ・シラン
アケナイ (明アケル)	アケナイ・アケン
ミタイ (ミル)	ミタイ・ミン (ミル)
オキタイ (起オキル)	オキタイ (オキル)
ミナイ	ミン
トドケナイ (トドケル)	トドケナイ (トドケル)
	トドケン

幡多のタイは平板型動詞につく場合には平に、起伏型動詞につく場合には動詞の山を一つずらして高低となってつづく。ナイは平板、起伏いずれにも高低となってつづく。

(3)なかった

(東京)	(幡多)
キナカッタ (着キル)	キナカッタ (キル)
ミナカッタ	ミナカッタ

大体低高低低の型で接続する。

(4)らしい・まい

(東京)	(幡多)
アケルラシイ (明アケル)	アケルラシイ (アケル)

アケマイ　　アケマイ

トドクラシイ（トドク）　トドクラシイ（トドク）

幡多のラシイは一般に低高低となってつづく。マイは平板型動詞には平につづくが、起伏型動詞にはカクマイ（書カク）・ノムマイ（飲ノム）・ヨムマイ（読ヨム）のように高低とつづく。

(5)た・て

（東京）　（幡多）

ニタ（似ニル）　ニタ（ニル）

ニテ　ニテ

トンダ（飛トブ）　トンダ（トブ）

トンデ　トンデ

カイタ（書カク）　カイタ（カク）

カイテ　カイテ

ミセタ（見ミセル）　ミセタ（ミセル）

ミセテ　ミセテ

幡多ではニタニテより・もニータ・ニーテと長呼するのが普通である。このテ・タは平板型動詞を起伏化しておいて接続するという特色がある。（この点十津川アクセントと類似の現象があるようだ。）従ってタ・テは東京のように平板型動詞を見わける基準にはならない。

(6)う・よう

（東京）　（幡多）

キョー（着キル）　キョー（キル）

ワラオー（笑ワラウ）　ワラオー（ワラウ）

タトー（立タツ）　タトー（タツ）

ニゲヨー（逃ニゲル）　ニゲヨー（ニゲル）

ウ・ヨウが平板型動詞につく場合、東京では平板を起伏化して接続する傾向があるようだが、（例外もあるが。）幡多にはこの傾向が無い。尚幡多の「着よう・逃げよう」はキロー・ニゲローが普通。中年以上はニギョーとも。

(7)ます・ません・ました・ましょう

（東京）　（幡多）

トビマス（飛トブ）　トビマス（トブ）

トビマセン　トビマセン

トビマシタ　トビマシタ

トビマショー　トビマショー

キマス（来クル）　サマス（クル）

キマセン　キマセン

キマシタ　キマシタ

キマショー　キマショー

幡多のマスは平板・起伏いずれの型の動詞にも大体高低の型で

接続する。

(8)だ・で・です

(東　京)	(幡　多)
ワタシダ（ワタシ）	ワタシダ（ワタシ）
ワタシデ	ワタシデ
ワタシデス	ワタシデス
テンキダ（天気テンキ）	テンキダ（テンキ）
テンキデ	テンキデ
テンキデス	テンキデス

幡多のワタシダはワタシダという人もある。テンキデスは極めてゆっくりした発音ではデにも山の現れることがある。

(9)だろう・でしょう

(東　京)	(幡　多)
イクダロー（行イク）	イクダロー（イク）
イクデショー	イクデショー
クルダロー（来クル）	クルダロー（クル）
クルデショー	クルデショー

幡多のイクダローはイクダローとも。これもイクロー（稀にイクローン）が普通。次にクルダローは極めてゆっくり発音すればロにも山が置かれがちである。

以上のほか助動詞として挙げるべきものが若干あるが、都合によって省略する。

六、助　詞

(1)が・は・を・に・へ・と・も・で・か・や

(A)体言に接続する場合。

(東　京)	(幡　多)
エ。カ（柄）	エガ
エ。カ（絵）	エガ
カゼ。カ（風カゼ）	カゼガ（カゼ）
ユキ。カ（雪ユキ）	ユキガ（ユキ）
クチワ（口クチ）	クチワ（クチ）
アタマワ（アタマ）	アタマワ（アタマ）
スミオ（墨スミ）	スミオ（スミ）
タケニ（竹タケ）	タケニ（タケ）
ハナニ（花ハナ）	ハナニ（ハナ）
ムコーエ（向ムコー）	ムコーエ（ムコー）
ハナモ（花）	ハナモ
ミモ（実）	ミモ
フデデ（筆フデ）	フデデ（フデ）

ミミデ（耳ミミ）　ミミデ（ミミ）
フデカ　フデカ
カミカ（紙カミ）　カミカ（カミ）
ウシャ（牛ウシ）　ウシャ（ウシ）
シマヤ（馬シマ）　シマヤ（シマ）

幡多ではエガ（柄）・エガ（絵）に於けるガの代りにワ・オ・ニ・エ・ト・モ・デ・カ・ヤを置いても高低関係は全く同じである。次に格助詞ガは方言でンとなることが多い。アメンフル（雨が降る）など。さて「柄が」はエガであるが、「柄が焼ける」はエガヤケルである。二音節で低高だったものがセンテンスになると高低と変化する。「火に焼ける」と「日に焼ける」を比較してみればヒニ（火）→ヒニヤケル、ヒニ（日）→ヒニヤケルとなる。前者は上下下下、後者は中下下下中とも云うべき高低関係に立つ。「牛が焼ける」は、ウシ→ウシガ→ウシガヤケルであり、「あの」がつけばアノウシガヤケルであり、「桜が咲く」は、サクラ→サクラガ→サクラガサクである。尚高知市では一音節語を長呼することがあるが、幡多では一般に長呼しない。

（B）用言に接続する場合

（東京）　（幡多）

イク。カよい　イクガ
イクワよい　イクワ
イクニちがいない　イクニ
イクトいった　イクト
イクモよいが　イクモ
イクカどうか　イクカ
イクヤいなや　イクヤ

イクガその他を元のセンテンスに直せば、イクガヨイ・イクニチガイナイ・イクトユータ……のようになる。

東京オモイ。カよい（オモイ）幡多オモイガ（オモイ）
ハヤイ。カかち（ハヤイ）　ハヤイガ（ハヤイ）
カルイワ羽だ（カルイ）　カルイワ（カルイ）
オモイワ石だ（オモイ）　オモイワ（オモイ）
カルイニ限る（カルイ）　カルイニ（カルイ）
ツメタイニ限る（ツメタイ）　ツメタイニ（ツメタイ）
ツライト見える（ツライ）　ツライト（ツライ）
スイモ（酸スイ）　スイモ（スイ）
アマイモ（アマイ）　アマイモ（アマイ）
オモイカ（オモイ）　オモイカ（オモイ）
カルイカ（カルイ）　カルイカ（カルイ）

ツライヤ悲しいやで（ツライ）ツライヤ（ツライ）

東京では平板型の形容詞にガ・ワ・ニ……などの助詞がつくと平板型が起伏化するようだが、幡多にもこの傾向が見える。

(2)の

（東　京）	（幡　多）
ユキノ（雪ユキ）	ユキノ（ユキ）
ハナノ（花ハナ）	ハナノ（ハナ）
アタマノ（アタマ）	アタマノ（アタマ）

東京では尾高型の体言にノが接続するとノは尾高型を平板化するが、（若干例外もある。）幡多ではノは平板化の力無く、従って元の型が保存される。

(3)から・だけ

(A)体言に接続する場合

（東　京）	（幡　多）
クレカラ（暮クレ）	クレカラ（クレ）
アサカラ（朝アサ）	アサカラ（アサ）
ソレダケ（ソレ）	ソレダケ（ソレ）
カワダケ（皮カワ）	カワダケ（カワ）

(B)用言に接続する場合

（東　京）	（幡　多）
ハジマルカラシマウマデ	ハジマルカラシマウマデ
（ハジマル・シマウ）	（ハジマル・シマウ）
ユーダケやぼ（云ユー）	ユーダケ（ユー）
ミルダケ（見ミル）	ミルダケ（ミル）
ツライダケだ（ツライ）	ツライダケ（ツライ）

(4)さえ・こそ・など

(A)体言に接続する場合

（東　京）	（幡　多）
キミサエ（君キミ）	キミサエ（キミ）
ウデサエ（腕ウデ）	ウデサエ（ウデ）
コレコソ（コレ）	コレコソ（コレ）
アメコソ（雨アメ）	アメコソ（アメ）
キミナド（君キミ）	キミナド（キミ）
ツキナド（月ツキ）	ツキナド（ツキ）

幡多のコレコソはコレコソとも。サエ・コソ・ナドは幡多では大体平板型には高低、起伏型には低々とつづく。

(B)用言に接続する場合

（東　京）	（幡　多）
キーテサエ嫌だ（聞キク）	キーテサエ（キク）

ステコソしない（ステル）　ステコソ（ステル）
ツライコソ薬だ（ツライ）　ツライコソ（ツライ）
ツライナドいうな　ツライナド

幡多のキーテサエはキーテサエとなることもある。（主にゆっくりした発音で。）

(5)なら・なり・より・まで・やら

（A）体言に接続する場合

（東　京）　（幡　多）

オレナラ行く（俺オレ）　オレナラ（オレ）
ユナリミズナリ　ユナリミズナリ
アレヨリ（アレ）　アレヨリ（アレ）
ヤマヨリ（山ヤマ）　ヤマヨリ（ヤマ）
バンマデ（晩バン）　バンマデ（バン）
テンマデ（天テン）　テンマデ（テン）
ウシヤラ（牛ウシ）　ウシヤラ（ウシ）
ンマヤラ（馬ンマ）　ンマヤラ（ンマ）

若干の例外もあるが、大体幡多では平板型に続けば高低、起伏型に続けば低低となる。

（B）用言に接続する場合

（東　京）　（幡　多）

イクナラ（行イク）　イクナラ（イク）
クライナラ（暗クライ）　クライナラ（クライ）

東京のイクナリヤメルナリ早くきめよう（ヤメル）は幡多でイクナリヤメルナリ（ヤメル）東京ツメタイナリアッタカイナリお望み次第（ツメタイ・アッタカイ）幡多ツメタイナリ（又はツメタイナリ）……アッタカイナリ（ツメタイ・アッタカイ）東京うちにイルヨリまし幡多イルヨリ（東京幡多イル）東京ツメタイヨリ暑いがいい幡多ツメタイヨリ（又はツメタイヨリ）東京イクマデお待ち幡多イクマデ　東京オドルヤラハネルヤラ（オドル・ハネル）幡多オドルヤラハネルヤラ（オドル・ハネル）

(6)ほど・ずつ・とも

（A）体言に接続する場合

（東　京）　（幡　多）

ワタクシホド　ワタクシホド
ヤマホド　ヤマホド
フタツズツ（フタツ）　フタツヅツ（フタツ）
ワタシトモ三人（ワタシ）　ワタシトモ（ワタシ）
（又はワタシトモ・ワタシトモ）

（B）用言に接続する場合

東京ウワササレルホドの事もしない幡多ウワササレルホド　東

京ネルホド幡多ネルホド　東京アツイ（厚）ホド持ちがよい幡多アツイホド又はアツイホド　幡多のホドは大体平に（厳密に云えばホドで切ればドに中位の山が来る。）つづく傾向がある。

(7)くらい・ながら・ところ・ばかり

（A)体言に接続する場合

（東　京）　（幡　多）

コレクライ　コレクライ

ジブンナ。カラ変だ（ジブン）　ジブンナガラ（ジブンナガラとも）（ジブン）

オンナ。カラモ（オンナ）　オンナガラモ（オンナ）

東京チュー。カクドコロカ小学校さえ出ぬ（チュー。カク）幡多チューガクドコロカ（チュー。カク）東京イケドコロカ海ほどある幡多イケドコロカ（東京幡多イケ）東京ジブンバカリよいとする幡多ジブンバカリ（ジブンバカリ・ジブンバカリとも）

幡多ではこれらの助詞が平板型体言につくと高低低、起伏型には低くつくという大体の傾向がある。

（B)用言に接続する場合

東京それをスルクライ（又はスル。クライ)馬鹿げたことはない幡多スルクライ（東京幡多スル）東京トドク。クライのところ幡多トドクグライ（東京幡多トドク）東京イタイ。クライなんだ)又はイタイ。クライ）幡多イタイグライ（東京幡多イタイ）東京キナガラ幡多キキナラ。カ（東京幡多聞キク）東京タチナ。カラ幡多タチナ。カラ（東京幡多立タツ）東京ミセルドコロカ幡多ミセルドコロカ（東京幡多ミセル）東京カユイドコロカ幡多カユイドコロカ（カユイドコロカとも）（東京幡多カユイ）東京ユーバカリで何もしない幡多ユーバカリ（「で」まで入れるとユーバカリデ）（東京幡多言ユー）

東京アカルイバカリでは駄目（アカルイ）幡多アカルイバカリ（アカルイバカリとも）

(8)の（用言に接続する場合）

（東　京）　（幡　多）

スルノはよせ（為スル）　スルノ（スル）

アカイノがよい（赤アカイ）　アカイノ（アカイ）

ツライノを我慢（ツライ）　ツライノ（ツライ）

平板型形容詞にノがつくと起伏化する現象は東京と幡多が一致する。

(9)が（用言に接続する場合）・し

（東　京）　（幡　多）

頭はハタラク。カ…　ハタラクガ

（ハタラク）　（ハタラク）

堅い事はカタイ。カ…　カタイガ（カタイ）

東京よみもスルシ書きもする幡多スルシ　東京まどはアカルイシ風も通る幡多アカルイシ　幡多も平板型の用言を起伏化する傾

向がかなり見える。

(10)にも・には・のに・ので・つつ

東京ナクニモ泣かれない幡多ナクニモ　東京ツメタイニモ程がある（ツメタイ）幡多ツメタイニモ（ツメタイニモ・ツメタイニモとも）（ツメタイ）東京ハタラクニワ働くが幡多ハタラクニワ東京オモイニワ重い幡多オモイニワ東京ヨンデルノニ返事しない幡多ヨンデイルノニ　東京アカルイノニ幡多アカルイノニ　東京サムイノニ幡多サムイノニ（サムイノニとも）東京スワッテルノデ幡多スワッテイルノデ　東京クライノデ幡多クライノデ（クライノデとも）東京何もシリッツ幡多シリツツ　東京理窟をイーツツ幡多イーツツ

幡多でもこの種の助詞が平板型形容詞につくと起伏化が起る。

(11)ば・と

	（東　京）	（幡　多）
	イケバ（行イク）	イケバ（イク）
	アガレバ（ア。カル）	アガレバ（アガル）
	フレバ（降フル）	フレバ（フル）
	カルケレバ（カルケレバ）（カルイ）	カルケレバ（カルイ）
	コケレバ（濃コイ）	コケレバ（コイ又はコイー）

東京ヨルトサワルトけんかだ幡多ヨルトサワルト（ヨルトサワルトとも）東京ナ。カイといけない幡多ナガイト

(12)て・でも・ては・たら・たり・たが

	（東　京）	（幡　多）
	オモクテ（オモイ）	オモクテ（オモイ）
	イタクテ（イタイ）	イタクテ（イタイ）
	ヤッテモ（ヤル）	ヤッテモ（ヤル）
	タッテモ（タツ）	タッテモ（タツ）
	トンデワ（トブ）	トンデワ（トブ）
	カエッテワ（カエル）	カエッテワ（カエル）
	シタラ（スル）	シタラ（スル）
	オキタラ（オキル）	オキタラ（オキル）
	ノッタリ（乗ノル）	ノッタリ（ノル）
	オリタリ（オリル）	オリタリ（オリル）
	スワッタ。カ（スワル）	スワッタガ（スワル）
	ニ。ケタ。カ（ニケル）	ニゲタガ（ニゲル）

幡多でも平板型用言にこれらの助詞がつくと、平板が起伏化される傾向を持つ。

以上の報告は二十代の男女数名を主にして調査したものであ

る。最後に言いもらした点につき若干補足しておく。

(1)幡多のアクセントはごくおおざっぱに言えば、東京のそれと比較した場合アクセントの山が京多よりも後へずれる傾向が見える。

(2)類聚名義抄の時代に平板に発音されていたらしい「矢」など東京ではすでに上型に変化しているのに、幡多は元の姿を保存している。ここんな例が若干認められる。

(3)金田一春彦氏は○○▽／○○▽／○○▽／○○▽という推定をされている。

(4)種々の観点から観て幡多アクセントは東京のそれよりは古い型を保っているようだ。

(5)三崎町下益野出身の一学生のアクセントでは、柄・気・子…が○▽、飴・牛…が○○、行く・買う…が○○、赤い・甘い…が○○○であった。

(6)佐賀町アクセントを若干挙げれば、柄・巣・毛…が○▽、尾・木・粉…も○▽、飴・牛…が○○、石・歌・足が…○○（人によっては全平にも）、行く・飛ぶ・書く…が○○、開ける・当てる…が○○○、受ける・起きる・落ちる…が○○○（人によっては○○○）、赤い・厚い…が○○○又は○○○である。高知に近い特殊型である。個人差が相当ある。

(7)白田川村白浜から有井川までの地帯は、佐賀アクセントと中村アクセントとの折衷アクセントで、ウミオミル（海）などの型が聞かれる。上川口から以西が純中村式になる。

(8)北幡及び檮原村のアクセントはやっかいである。紙数の都合でその片鱗にしか触れ得ないのは残念である。今江川崎村江川を例にとるならば、柄・毛・絵…にガ・ワ・エ等の助詞をつけると○▽となったり○▽となったりする。飴・石・足・息・赤…悉く同型で○○・○○▽（稀に○○▽）が多いが、○○・○○▽ともなって安定性が無い。「飴」を最初発音させるとアメ、直ちに第二回目を試みるとアメで、しかも本人は一向狂ったのに気づかぬと言った状態である。津大・十川・昭和村等のアクセントもこれに準ずる。（十川村井崎では名詞二音節語が○○・○○▽の傾向が多い。）大正町北の川・田野々・木屋ヶ内等は中村に近いが、形容詞などに一型的要素が認められる。檮原村も北幡に準ずるアクセントで、名詞二音節語も一類から五類まで○○・○○▽（時に○○▽）とも○○・○○▽とも発音され浮動性に富む。「箸」と「橋」・「鳴る」と「成る」など音韻論的にも区別が無いようだ。これらの地帯についてはまだ最後的断定は下し得ないが、大体一型的な地帯と認めて大過ないようである。仮りに準一型地帯としておく。（松原・初瀬には乙種も若干混入している。）

燕稿を草するに当り、楳垣実・大西雅雄・鬼春人・金田一春彦・柴田武・平山輝男・藤原与一・和田実等の諸氏から種々御示唆を賜わった。ここに深謝したい。尚本論文は文部省科学研究費による成果の一部であるが、国語研究所の委託研究の一部とも重複する。

（二九・二・八）

—高知大学助教授—